

仙台市文化財調査報告書第187集

仙 台 市
愛 宮 山 橫 穴 墓 群

— 第 3 次 発 挖 調 査 報 告 書 —

1994年3月

仙 台 市 教 育 委 員 会

仙台市文化財調査報告書第187集

仙 台 市
愛 宮 山 橫 穴 墓 群

—第3次発掘調査報告書—

1994年3月

仙 台 市 教 育 委 員 会

序

愛宕山をはじめ大年寺山を含む仙台市向山周辺は、古くから多くの文化財のあるところとして知られています。江戸時代から仙台地方の総鎮守として人々の信仰を集めてきた愛宕神社や、虚空蔵堂など数多くの神社があり、現在でも参詣する人が絶えません。また、周辺の山裾斜面に多くの横穴墓が存在することも知られており、中でも愛宕山横穴墓群は、全国的にも類例の少ない装飾横穴が発見されている地域もあります。

今回調査されました愛宕山横穴墓群は、遺存状況が必ずしも良好とはいえないものの、ほかの遺跡にくらべて調査例の少ない横穴墓を検討する上で、また、7世紀から8世紀にかけての仙台の歴史を知る上でも非常に注目されるものであります。

近年、仙台市内におきましては開発が著しく、埋蔵文化財も年々その姿を失いつつあるのが現状であります。今回発見された横穴墓も、調査後はほとんどが削平され、現在では、この横穴墓に関しては、本報告書の記録によってのみ伺い知るだけとなりました。

このようなことから、本報告書も多くの方々に利用され、郷土の歴史を知る手がかりとなれば幸いです。

末尾ながら、調査の遂行にあたってご協力いただきました多くの方々に対しまして、厚く御礼を申し上げます。

平成6年3月

仙台市教育委員会

教育長 東海林 恒英

例　　言

1. 本書は仙台市太白区向山4丁目地内に所在する愛宕山横穴墓群の第3次発掘調査報告書である。第1次・第2次調査の経緯はII-3(P5~6)でまとめてあるので参照されたい。
2. 本調査は、福仙興業株式会社と高橋良子邸新築工事の施行担当である株式会社NKホームとの協議により、仙台市教育委員会が委託され行ったものである。
3. 本報告書作成にあたり、整理及び編集・執筆の分担は次のとおりである。

本文執筆	熊谷裕行
遺構トレース	大山のり子・熊谷
遺物実測	小松愛
遺物トレース	小松
遺構写真撮影	調査員全員がこれにあたった。
遺物写真撮影	稻葉俊一
遺構図版作成	永田英明・熊谷
写真図版作成	永田・熊谷

編集は本課調査第一係主任木村浩二と協議しながら、熊谷が行った。

4. 遺構実測図の高さは標高値で記載した。また、方位は磁北で表している。当市において磁北は真北に対して西偏7°20'である。
5. 遺物略号は次のとおりで、各々類別ごとに番号を記した。

E	須恵器	K	ガラス小玉	N	金属製品
---	-----	---	-------	---	------
6. 本書の地形図のうち、第1図は建設省国土地理院発行の1/25000「仙台市西南部」および「仙台市東南部」の一部を縮小して使用したものである。
7. 第2図は「仙台市仙塩広域都市計画図」1/2500の一部を縮小して使用したものである。
8. 本横穴墓群出土遺物、実測図、写真等の資料は、仙台市教育委員会が一括保管しているので活用されたい。

目 次

序

例 言

I. はじめに.....	1
1. 調査要項.....	1
2. 調査経過.....	1
II. 遺跡の位置と環境.....	3
1. 地理的環境.....	3
2. 歴史的環境.....	3
3. 愛宕山周辺の横穴墓群.....	5
III. 調査の方法.....	8
IV. 発見された遺構と遺物.....	11
【第1号横穴墓】.....	11
【第2号横穴墓】.....	12
【第3号横穴墓】.....	15
【第4号横穴墓】.....	15
【第5号横穴墓】.....	17
【第6号横穴墓】.....	19
【第7号横穴墓】.....	19
【第8号横穴墓】.....	21
【第9号横穴墓】.....	22
【第10号横穴墓】.....	27
【第11号横穴墓】.....	27
【第12号横穴墓】.....	31
【第13号横穴墓】.....	33
【第14号横穴墓】.....	35
【第15号横穴墓】.....	35
【第16号横穴墓】.....	35
【第17号横穴墓】.....	36
【第18号横穴墓】.....	36
V. 総 括.....	37
1. 横穴墓の構造.....	37
2. 横穴墓の変遷.....	40
3. ま と め.....	43
観察表・集計表.....	45
写真図版.....	47

I. はじめに

1. 調査要項

遺跡名 愛宕山横穴墓群（県登録番号：01196、市：C-028）
 所在地 仙台市太白区向山4丁目70-7、70-30外
 調査主体 仙台市教育委員会
 調査担当 仙台市教育委員会文化財課
 調査協力 福仙興業株式会社
 高橋良子
 株式会社 NK ホーム
 調査期間 平成3年9月24日～平成3年10月23日
 調査員 藤原信彦・主浜光朗・熊谷裕行

2. 調査経過

平成2年10月18日付けで福仙興業株式会社より仙台市太白区向山4丁目地内において、事務所兼共同住宅の建築にかかる発掘届が提出された。また平成3年9月12日には、高橋良子氏より同地内において、住宅新築に伴う宅地造成にかかる発掘届が提出された。両地点は、「愛宕山横穴墓群」B・C地点（C-028B・C）として仙台市文化財分布地図に示されている範囲内に敷地の一部がかかっており、横穴墓の存在が十分に予想された。これを受けて仙台市教育委員会では、事業主体である福仙興業株式会社及び高橋良子邸新築工事の施行担当である株式会社NK ホームと協議のうえ、造成工事の際に試掘調査を実施することにした。その結果、当地には従来知られていた範囲を超えて横穴墓が構築されていることが判明した。このため申請者と協議を行い、記録保存を目的とした発掘調査を行うこととなった。

9月24日から、重機にて周辺部分の崖面表土の排除を開始したところ、東半部で6基の横穴墓を確認した。さらに翌25日には、西半部でも5基の横穴墓を確認し、計11基となった。

9月26日から、各横穴墓の精査作業に入った。精査は事業主体と協議の上、東半部から行うこととした。東半部で確認された6基の横穴の中で、完全なままで保存されていたものは一つもなく、2号横穴墓と5号横穴墓がかろうじて床面の平面形を知り得るほかは、羨道部はもちろん玄門部から玄室天井部まで削平されてしまっており、遺存状況は極めてよくないものであった。また、この日の調査では、2号横穴墓の羨道部の下からと、そのさらに東側にも横穴墓を確認し、それぞれ7号横穴墓・8号横穴墓として調査を進めた。7号横穴墓は、玄室の天井部は崩落していたが、立面形を推測できる状況であった。8号横穴墓は、櫻孔が著しくほと

んど遺存していなかった。

西半部の調査は、9月30日から開始された。当初、5基の横穴墓（9～13号横穴墓）が確認されていたが、東半部に比較して遺存状況の良いものがある。10号横穴墓は、玄室の天井部が残存しており、玄室内には床面のほぼ半分に敷石が残っていた。また、13号横穴墓では、数少ない出土遺物の一つである直刀が発見された。

10月14日から、工事削平深度のレベルに横穴墓が存在するかどうかの調査を行った。その結果、新たに5基の横穴墓（14～18号横穴墓）の存在を確認した。そのうち、14号横穴墓は工事削平深度以下であり、奥壁のみの残存であったため精査は行わなかった。また、17・18号横穴墓に関しては、工事区域外にあるため精査は行わなかった。

最終的に横穴墓の総数は18基となったが、うち精査を行ったものは15基であり、10月18日に全ての横穴墓の精査を終了した。

各横穴墓から採取した床面直上層の土壌サンプルを、10月22日から同23日まで、大野田遺跡発掘調査事務所にて水洗した。その結果、ガラス小玉などが発見された。

なお、調査の進行にあたっては、重機・事務所の使用、作業員の援助のほか調査全般にわたって、福仙興業株式会社ならびに高橋良子氏、また施行担当である株式会社NKホームの全面的なご協力をいただいた。ここに記して、感謝の意を表したい。

II. 遺跡の位置と環境

1. 地理的環境

愛宕山横穴墓群の今回の調査地点は、仙台市勾当台通りの宮城県庁前（北緯38度15分54秒、東経140度52分26秒）より南方約2.5km、仙台市太白区向山4丁目に所在する。

仙台市の地形を概観すれば、西側の奥羽山脈とそれから派生している七北田・青葉山・高館の各丘陵部、東側の仙台湾沿いに広がる平野部とに大別される。また丘陵部から平野部へと七北田川・広瀬川・名取川等が流れしており、中流域で河岸段丘、下流域では扇状地・後背湿地・川河床など沖積地によく見られる特徴的な地形を形成している。

本横穴墓群の所在する愛宕山のすぐ北側には北西から広瀬川が蛇行しながら流れおり、この愛宕山を過ぎて南東方向に流れ名取川と合流する。また愛宕山の南には、これと平行するようだ大年寺山が張り出しており、両者にはさまれるわずかな隙間が沢状に形成されている。この付近一帯は、旧地名で「大窓谷地」と称されていることからも地形の一端を伺い知ることができる。本横穴墓群は、この沢に面した愛宕山の南西斜面に立地している。この沢をはさんだ南側の大年寺山北斜面や広瀬川の段丘崖にも横穴墓が構築されている。

地質的にみれば青葉山丘陵には、主に鮮新統仙台層群と第四系の青葉山層が分布している。
 (註：1) 本横穴墓群が位置する愛宕山は、この青葉山丘陵の北東縁にあたる。地表から厚さ1～2 mの火山灰層・段丘疊層があり、その下に基盤岩層が堆積している。基盤岩層の最上層は新第3紀鮮新世末の大年寺層（細砂-粗砂の範囲にわたる砂岩を主とした岩層：絶対年代B.P. 100～200万年）であり、その下には向山層の主部の上部（従来の「八木山層」：シルト岩・砂岩・凝灰岩・亜炭の互層）が分布している。さらに広瀬川流域の下層には、軽石凝灰岩および細粒凝灰岩層である広瀬川凝灰岩部層が分布している。この大年寺層・向山層の上部とも河川ないし浅海性の堆積層で、層中に多量の貝や木葉化石等を含んでいる。

本横穴墓群は上記の大年寺層に構築されている。この層は、軟質の砂岩であるため横穴墓を構築する上では比較的容易であったと思われる。しかし随所にクラックがあり、また下層の向山層は不透水層であるため湧水が多く、崩落が激しい。

2. 歴史的環境

仙台市には前期旧石器時代から中世・近世に至るまで数多くの遺跡が存在している。各時代の代表的な遺跡を列記すれば次のようになる。

前期・後期旧石器を出土した山田上ノ台遺跡、北前遺跡。後期旧石器時代の森林跡が検出された富沢遺跡。ここでは石器や焚火跡、植物化石・昆虫化石・動物の骨なども発見された。

縄文時代の遺跡には、大集落跡である山田上ノ台遺跡をはじめ、北前遺跡・三神峯遺跡・上野遺跡などがあり、これらはいずれも名取川北岸の段丘上に点在している。自然堤防上には、六反田遺跡・下ノ内遺跡・伊古田遺跡・下ノ内浦遺跡などがあり、この自然堤防上の地域は後世まで居住域として続いている。

弥生時代の遺跡としては、富沢遺跡の各地点から水田跡が検出されている。また西台畠遺跡からは中期の壠棺墓、下ノ内浦遺跡から後期の土坑・竪穴造構が検出されている。しかしこの時期の集落はまだ発見されていない。

次に愛宕山・大年寺山からその南方に広がる郡山低地周辺について、古墳時代から奈良時代の遺跡を中心に概観してみたい。

古墳時代前期の集落跡としては、伊古田遺跡・六反田遺跡などがあり、竪穴住居跡が検出されている。墳墓では、この時期の方形周溝墓が安久東遺跡・戸ノ内遺跡で発見されているが、これらは名取低地に位置するものである。郡山低地においては、この時期の古墳・方形周溝墓は発見されていない。また広瀬川左岸の霞ノ日低地には、前方後円墳の遠見塚古墳がある。

古墳時代の中期になると、古墳もその数を増していく。兜塚古墳・砂押古墳・金洗沢古墳などが長町一利府構造線に沿って並んでいる。また、すでに削平されているが一塚・二塚・裏町古墳などの存在も明らかになっている。その他にも埴輪の採集される遺跡があることから、古墳はさらに多数存在していたものと考えられる。集落関連の遺跡でこの時期のものとしては、富沢遺跡から水田跡、下ノ内浦遺跡・泉崎浦遺跡から住居跡が発見されている。

古墳時代の後期になると、それまでの高塚古墳に代わって横穴墓の造営が盛んになり、奈良時代にかけて隆盛する。郡山低地に沿う青葉山丘陵の山裾斜面には多くの横穴墓が存在している。北から、愛宕山・大年寺山・宗禪寺・茂ヶ崎・ニツ沢・土手内の各横穴墓群があり、総数100基を超えると考えられている。また、仙台市内における横穴墓の分布は、ここ向山・西多賀地区と岩切地区（入生沢・白屋敷・東光寺横穴墓群）に集中している。これ以外では、燕沢地区（善応寺横穴墓群）、茂庭地区（向根・梨野横穴墓群）で確認されている。これらの横穴墓群の前方には平野部が開けており、横穴墓群の分布は大小の河川近辺であることが多い。さらに河川の自然堤防上には、横穴墓群の造営基盤である集落跡の存在が認められることが多い。

多くの横穴墓群が存在する青葉山丘陵の前方の郡山低地には、多賀城造営以前の宮衙跡・郡山遺跡があり、横穴墓の造営とほぼ同時期であることから、その関連性がしばしば指摘されている。（第1図）

3. 愛宕山周辺の横穴墓群

愛宕山周辺には前述のとおり多くの横穴墓が存在するが、本格的な調査が行われたのは、1973

II. 遺跡の位置と環境

年の「愛宕山横穴墓群 B 地点」が最初である。これまでの調査結果を概観すると次のようになる。

1973年「愛宕山横穴墓群 B 地点」の調査は、仙台市教育委員会によって行われた。横穴墓は少なくとも10基確認され、そのうち9基を調査している。確認された横穴墓のうちほとんどは変造を受けており、遺存状態は良好ではなかった。横穴墓の平面形は方形のものが多く、立面形はアーチ形（かまぼこ形）のものが多いとされる。また、袋状を呈す規模の小さい横穴の存在が報告されている。遺物では、腐蝕した人骨と副葬品とみられる須恵器（長頸壺）が出土している。構造や形態・出土遺物から、7世紀後半～8世紀頃の豪族の墳墓とされている。（岩測：1974）

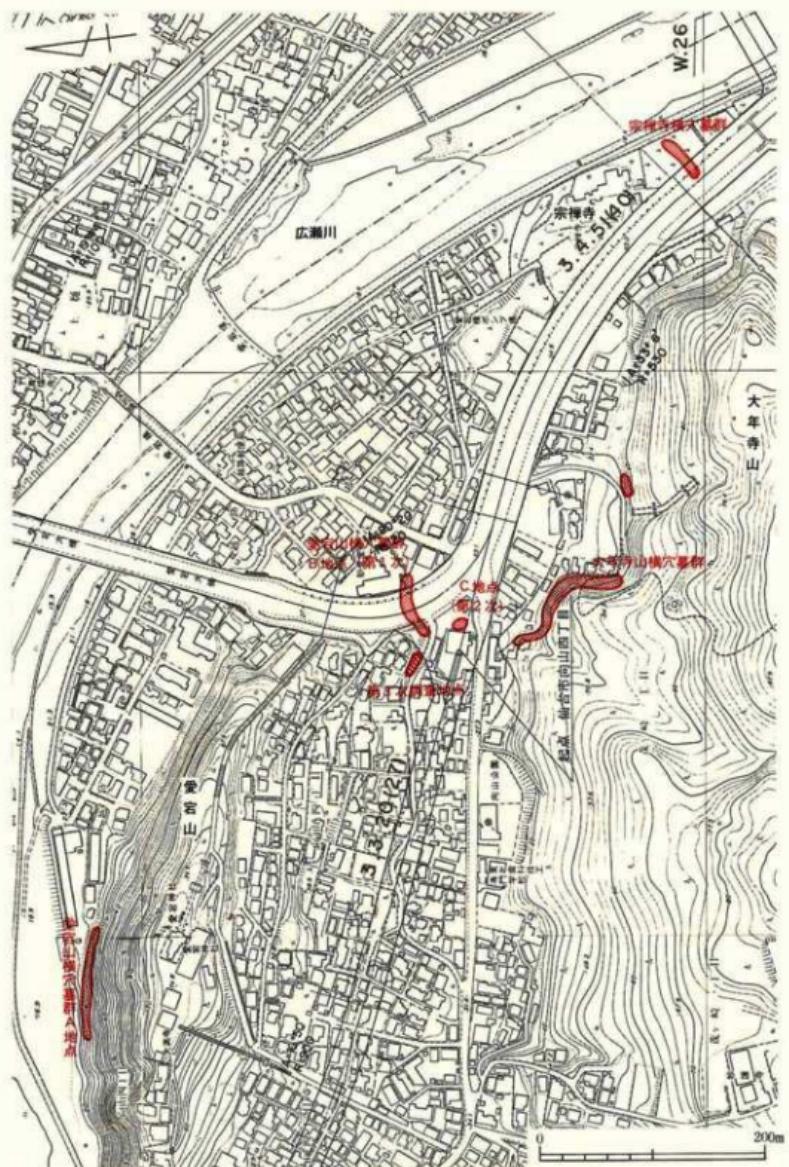
ついで1976年には「宗禅寺横穴墓群」の調査が仙台市教育委員会によって行われた。15基確認され、うち14基が調査されている。玄室から玄門・羨道・羨門・前庭という横穴墓の基本形態を備えている点で、愛宕山周辺の横穴墓群の中では、比較的遺存状況の良い横穴墓群である。平面形態は、隅丸方形・不整形・長方形など多種多様である。しかし台床を持つものが半数近くあることや、家形のものが多い点は注目される。また、工具痕跡がよく観察されている。遺物は、須恵器長頸壺・長頸瓶・平瓶・横瓶・提瓶・壺・土師器壺、刀子などが出土している。年代は、7世紀後半～8世紀とされている。（伊東・岩測・田中：1976）

また同年、仙台市教育委員会によって行われた「愛宕山横穴墓群 C 地点」では、装飾横穴墓が発見された。装飾は平行線や丸・十字文、円文などが玄室奥壁に描かれていた。平面形はほぼ方形で、立面形はドーム形の系統を引いた家形（宝形造り）である。また台床を持たない装飾横穴墓であり、愛宕山横穴墓群中で唯一の家形であることが報告されている。遺物では、人骨や土師器壺が出土しており、年代を7世紀後半（中葉に近い）の築造としている。また、多賀城以前の官衙跡である郡山遺跡との関連を指摘している。（結城：1985）

1988年には、宮城県教育委員会と仙台市教育委員会の合同で大年寺山横穴墓群の発掘調査が行われた。総計で26基の横穴墓が調査されている。その結果、平面形・立面形とともに多種多様な横穴墓が確認され、中には赤彩された装飾横穴墓も発見されている。また鉄刀や馬具などの金属製品が多数出土している。それをもとにした年代では、6世紀末～7世紀代の年代を与えている。そして、大年寺山周辺の横穴墓群を一括して「向山横穴群」とすることを提唱している。さらに、これらを造営した人々の政治的・経済的関係についても考察している。（進藤・佐藤・菊地：1990）

今まで実施した B 地点の調査を第1次、C 地点の調査を第2次とすると、今回の愛宕山横穴墓群の調査は第3次となり、総計18基の横穴墓が確認された。よって、周辺の横穴墓群と合わせると、確実なものだけでその数は、52基にのぼる。（第2図・註：2）

II. 遺跡の位置と環境



第2図 愛宕山周辺横穴墓群分布図

III. 調査の方法

本横穴墓群は北を愛宕山、南・西を大年寺山によって囲まれたわずかな平場に面している。広瀬川に向かって東にのびるこの地域は、旧地名が「大窪谷地」と称されており、北西方向から入り込んでいた小さな沢によって形成された痕跡がうかがえる。調査は、この大窪谷地に面する愛宕山の南西側斜面を対象に行った。

前述のとおり、この付近は、愛宕山横穴墓群B地点の一部にかかっていることから試掘調査を行ったところ、古代の横穴墓が確認された。

造成工事の事業計画によれば、当該地は、この愛宕山の南西側斜面を現在市道が走っているレベルまで削平し、平場を作り出す計画となっていた。このため確認された横穴墓は、そのほとんどが破壊されてしまうことから、記録保存のための本調査に移行することとした。

調査は、先に工事に着手する東半部から行った。当初、東半部では6基の横穴墓を確認したが、斜面上方むかって東側より、また上段を優先して1~6の番号を付した。さらに、2号横穴墓の下に1基の横穴墓を発見し、これを7号横穴墓とした。その7号横穴墓と6号横穴墓の間に発見した横穴墓を8号横穴墓とした。

西半部の調査でも同じく、斜面上方むかって東側より9~13までの番号を付したが、調査中にさらに発見された横穴墓については、そのつど発見順に14~18までの番号を付した。

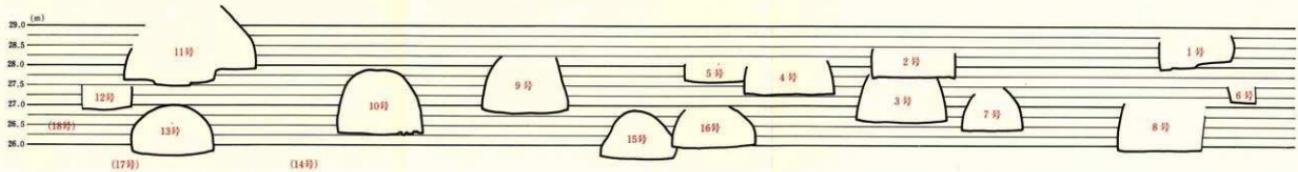
検出された横穴墓群は、総じてその遺存状況が悪く、また脆弱な基盤層で安全性の確保が難しかったこと等もあって、玄室内堆積土の観察・記録を十分に行うことができなかった。

出土遺物については、そのつど出土状況写真を撮影したり、1/20の実測図を作成したりしたが、遺存状況の良くない遺物等に関しては、出土地点のみの記録にとどめたものもある。また、表面上発見されにくい玉類に関しては、遺漏のないよう、玄室内堆積土の床面直上層をすべて採取し土壤水洗作業を行った。

精査の終了した各横穴墓に関しては、1/20の平面図・縦断面図・横断面図、また玄門部の遺存するものについては玄門立面図等の実測図を作成し、全景写真を撮影した。敷石の状況など、必要に応じて細部の写真撮影をしたものもある。しかし、壁面のノミ工具痕等については十分な記録化をすることができず、実測図に幅・長さ・方向を記録するにとどめた。

調査区全体の測量に当たっては、工事着工期日まで期間が限られていたことから写真測量とし、1/50の遺構平面図と立面図を作成している。したがって、本報告書に記載している第3図・調査区全体図は、この実測図をもとにしたものである。

14号・17号・18号横穴墓に関しては、造成計画の掘削深度よりもさらに下にあることと、調査区外に延びることから精査は行わなかった。



第3図 調査区全体図

0 1 5 10m

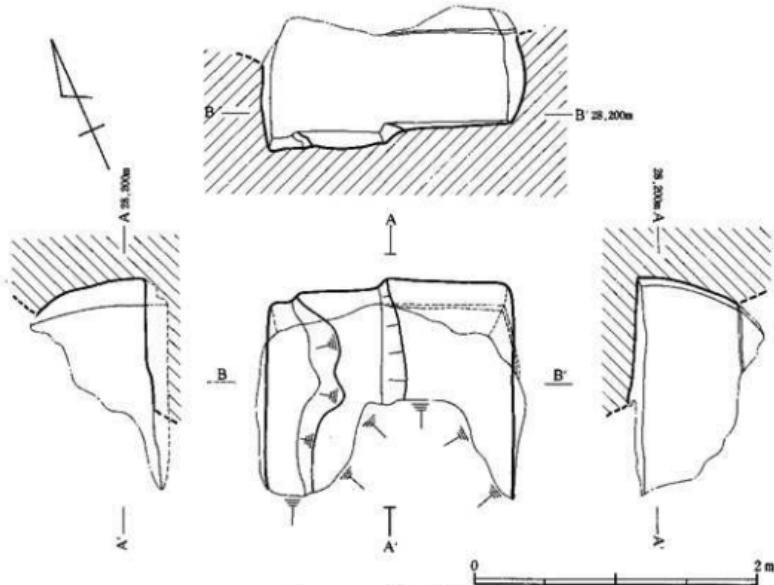
IV. 発見された遺構と遺物

今回の調査によって発見された横穴墓は、総計18基であるが、そのうち精査を行ったものは、14号・17号・18号横穴墓をのぞく15基である。

【第1号横穴墓】

今回の調査区の東端部、18基の横穴墓のうち最上部に位置する。玄室天井から玄門にかけて削平され、玄室の奥壁と床面の約1/2を残すのみである。葬道に至っては全く不明である。(第4図・写真図版3)

【玄室】 平面形は、方形あるいは長方形になるものと推定される。しかし、幅1.7mを計るほかは明らかではない。玄室の中軸線の方向は、N-22°-E(誤: 3)である。奥壁はやや内傾しながら立ち上がり、奥壁と側壁は後線によって区画されている。また奥壁と側壁の残存部分には、約0.8mほどにわたり「軒回り」を表現したと思われるわずかなえぐり込みの線がある。このことから考えて、立面形は家形になるものと考えられる。床面の残存部分の右半部には、幅0.8mほどの台床が設けられている。また左側には、崩落のため上幅ははっきりしないが奥壁



第4図 1号横穴墓実測図

